

# 初期ボードリヤールにおける資本主義仮説の検討

水原俊博

## 1 はじめに

### 1.1 本稿の目的

本稿は、タイトルにあるとおり、「初期ボードリヤール (the early Baudrillard)」における資本主義についての仮説を代表的な文献について吟味し、取り出すことを目的とする。

### 1.2 本稿の構成

まず、1.3では、ボードリヤールについての先行研究の動向について(1.3.1)さらに、本稿の研究に関する先行研究について(1.3.2)確認する。次に、1.4では、現在までつづく、ボードリヤールの理論的軌跡(theoretical trajectory)において、初期ボードリヤールという区分を用いる理由について、研究テーマとの関連で検討する。その上で、2では、初期ボードリヤールの資本主義仮説を『モノの体系』<sup>1)</sup>(1968=1980)『消費社会』<sup>2)</sup>(1970=[1979] 1995)『記号の経済学批判』(1972=1982)『生産の鏡』(1973=1981)『象徴と交換と死』(1976=[1982] 1992)といった代表的著作から、それぞれ抽出し、それについて、3で結論する。

### 1.3 先行研究<sup>3)</sup>

#### 1.3.1 先行研究概観

まず、ボードリヤールの社会理論、学説についての先行研究を簡単に俯瞰しよう。

ボードリヤールの社会理論、学説研究は、特に

英語圏において広範な分野で展開されてきた特筆すべきは、以下のように、カナダの研究者の貢献が決して小さなものではないことである。たとえば、米国では、批判理論、「文化研究(cultural studies)」の立場から、Kellner(1989) Best and Kellner(1991: 111-45, 1997: 79-123)が、未邦訳を多く含む英訳文献を、包括的かつ批判的にサーベイしている。また、Kellner ed.(1994)はサーベイだけでなく、マーケティング、資本主義システムなどとの関連で、ボードリヤールの議論を検討する、社会学を含む広範な分野の論文を収録している。さらに、ボードリヤールの数多くのインタビューを編纂するなど(Baudrillard 1993)英語圏へのボードリヤールの紹介者の一人である社会学者Gane(1991a, 1991b, 2000)は、社会学、哲学、文学理論など広範な分野について、ボードリヤールの未英訳のものを含めた膨大な文献について、どちらかといえば好意的に検討している。他方、カナダでは、ボードリヤールとの共著もある社会学者Kroker([1985] 1986)が、哲学的に(マルクスとニーチェとの関連で)特に、1980年代におけるボードリヤールの業績を考察し、また、後述のLevinとの2つの共著Kroker and Levin(1983, 1993)では、ともに、やはり哲学的(マルクス主義)あるいは精神分析的に、ボードリヤールの理論を考察し、特に、前者では、フランスの思想状況(構造主義、ポスト構造主義)との関連で、後者では、マルクス主義における思想的起源について、検討している。なお、Kroker and Cook(1986)ボードリヤールの論文も含んだ

Kroker, A. and Kroker, M. eds. (1988) では、ボードリヤールと共同歩調をとり、後者では、ボードリヤールの主張(ポストモダニティ、シミュレーション)について挑発的な(provocative)議論を展開している。他にも、先述したボードリヤールの文献の紹介者でもある(Baudrillard 1972=1981)精神分析学の研究者のLevin(1996)は、時系列的にボードリヤールの著作をサーベイし、ボードリヤールの思想的な起源について、さらに精神分析的な考察について議論し、また、ガタリ(Guattari, F.)などフランスのポスト構造主義についての業績のある哲学研究者のGenosko(1994)は、ボードリヤールへのマクルーハン(McLuhan, M.)の影響(メディア論的検討)、「象徴交換(échange symbolique)」などの概念について議論し、さらに、1960年代前半から中頃のボードリヤール(The young Baudrillard)の文献を編纂している(Baudrillard 2001)。最後に、その他の地域については、英国では、Rojek and Turner eds. (1993)では、社会学を含む広範囲の分野の著者らが、ボードリヤールの議論について批判的な検討を行い、オーストラリアの現代美術の研究者Butler(1999)は、ボードリヤールの、特に、ポストモダニティに関連する諸概念(シミュレーションなど)を整理する試みを行っている。

次に、日本国内におけるボードリヤールについての先行研究の動向を確認する。まず、ボードリヤールの文献の詳細な吟味はしないものの、その主旨や主張について検討するもの、または、ボードリヤールの議論を参照し、自身の消費論、現代社会論を展開するものは、それこそ無数に存在するといえよう<sup>4)</sup>。たとえば、社会学とその隣接分野についていえば、間々田(2000)、松原(2000)、見田(1996)、佐伯(1988)などは、それぞれ、章・節をもうけて、そのような試みをしている。だが、ボードリヤールの社会理論、諸概念について、文献を詳細に検討した先行研究は、ほとんどないのが実情だと思われる。それでも、しいていえば、内田(1987)は、そうした研究に該当する

といえよう。実際、これまで拙稿(水原 2002, 2003)では、そのように扱ってきた。たとえば、「ハイパーリアル」(内田 1987: 26)、「非構造的な差異」(ibid.: 66)といった用語を内田は用いるが、前者は、ボードリヤールの文献——たとえば、『象徴交換と死』——から取り込んだものだと思うわれ、後者の非構造的差異については、『モノの体系』におけるモノの「非構造的要素(éléments astructurels)」(Baudrillard 1968: 85=1980: 67)という概念を、積極的に領有=流用した(appropriate)造語のように見える。その他にも、「資本の『自律的なシステム』」(内田 1987: 47)、あるいは、資本主義「システムの自己準拠的な構造」(ibid.: 67)といった内田の考え方は、『モノの体系』における生産の秩序、あるいは、経済「システムの自律化」(Baudrillard 1968: 222=1980: 1999)の議論を発展させたもののように見える(2.1の後半参照)。そして、内田はこうした議論を展開するのに、マルクス、特に、『経済学批判要綱(Grundrisse)』(Marx [1858-59] 1953=1959-65)における、大工業が発達した資本主義的生産様式の議論に依拠しているのだが、それは、ボードリヤールの『象徴交換と死』についても同様なのであり(2.5参照)。内田の議論の趣旨は、『象徴交換と死』、『記号の経済学批判』、『生産の鏡』での主張と一致するところも多いように思われる。さらに、内田の消費社会についての叙述では、『消費社会』と同様に、ポップ・アートについて言及している。たしかに、内田の消費社会論、あるいはそれにもとづく資本主義論は、ボードリヤールだけに依拠しているだけでなく、広範な領域の文献に言及している。だが、このように、その議論の、特に中心的な概念やアイデアは、ボードリヤールのもと同じか、あるいは、おそらく、ボードリヤールの文献に起源を求めることができる。それでも、内田は、上述の概念、アイデアの出典を必ずしも明記せず、それらを説明する場合も、ボードリヤールを十分に引用して論じているわけではない。そのため、内田の議論が、ボード

リヤールの文献を詳細に検討した先行研究に該当すると判断するのに躊躇する。しかし、内田の議論の重要な概念、アイデアへのボードリヤールの影響は明らかであり、しかも、ボードリヤールの文献にあっては、難解、あるいは曖昧な概念が、内田の議論では、明瞭になり、また、ボードリヤールのアイデアは、内田の議論でさらなる発展を遂げているように思われる。こういう次第で、内田 (ibid) は、叙述上のいささかの問題点はあるものの、ボードリヤールについての優れた先行研究だと判断してよいだろう。

### 1.3.2 資本主義の仮説についての先行研究

ところで、本稿では、1.1で述べたように、「初期ボードリヤール (the early Baudrillard)」における資本主義についての仮説を代表的な文献について、吟味することを目的とする。ここで、資本主義の仮説について、簡単に述べると、それは、「経済システム」<sup>5)</sup>のマクロ的な作動にかかわるものであり、端的には、ボードリヤールは、消費が記号化することで資本主義が延命していると考えている(3参照)。したがって、本稿では、こうしたボードリヤールの仮説を、文献から取り出すことになる。だが、先述の先行研究のほとんどは(1.3.1参照)こうしたことを行っていない。例外的に、内田(1987)は、経済理論を参照して、こうした仮説を展開している。しかし、前項で見たように(1.3.1後半参照)内田は、こうした議論を、ボードリヤールの文献を明示して検討しているわけではない。他方、英語圏では、その研究の多くが、人文学系の研究者によるもので、こうした経済システム的な問題を詳論していない。むしろ、消費が記号化するという意味で、消費社会化した資本主義において、消費、需要がどのように「統制=管理 (contrôle)」されているのかという問題にこそ、関心があるように思われる(Kellner 1987: 27)。しかし、ボードリヤールの議論は、経済システムとしての資本主義の作動についても議論しているのであり、それは、消費、需

要の統制=管理という問題の根幹にかかわるはずである。なぜとって、消費、需要を統制=管理することで、資本主義が延命(継続的に作動)することがなければ、その統制=管理は、経済システム(資本主義)にとっては、ほとんど意味がないように思われるからである。したがって、ボードリヤールの経済システム(資本主義)についての仮説を、文献から取り出し、検討する本稿の試みは、重要な作業だと思われる。

### 1.4 初期ボードリヤールについて

まず、ボードリヤールの現在までつづく理論的軌跡を確認しておこう。ボードリヤールが著作を開始したのは、おそらく、1950年代からで、当時、ドイツの戯曲の仏訳や文芸批評など、おもに文学方面の仕事をしていたボードリヤールが<sup>6)</sup>、社会理論、つまり、文学を含めたより広範な領域(言語・歴史、経済・政治・文化・芸術・メディア・性現象 (sexualité) など)についての理論的考察に、仕事の中心を移していったのは、67年に、*L'homme et la société*(『人間と社会』)誌に寄せた「M. マクルーハン『メディア論』書評(“Compte rendu de Marshall McLuhan: *Understanding Media*”)」(Baudrillard 1967=2001)からで、それ以降、現在まで多産な活動を続けている<sup>7)</sup>。さて、こうした現在までの業績のうち、本稿にとって関心があるのは、社会理論に取り組んでからの業績、特に、資本主義、消費などをテーマとした文献、つまり、代表的な書物でいえば、『モノの体系』以降の業績である。そして、この社会理論家としての活動期間は、ポストモダニティ (postmodernité, postmodernity) について論じるようになって以降と、それ以前とに分けることができる。厳密に、ポストモダニティについて明示的に言及したのは『シミュラクルとシミュレーション』(Baudrillard 1981=1984)の「ニヒリズムについて (“Sur le nihilisme”)」(Baudrillard 1981: 227-34=1984: 197-204)の章においてであるが、その前年の80年には、「近代の終焉、あるいはシミュレーショ

ンの時代 (“La fin de la modernité ou l'ère de la simulation”)(Baudrillard 1980) という論文を著している。要するに、ポストモダニティについては、1980年から論じるようになったのである。したがって、80年を境に、社会理論家としてのボードリヤールの理論的軌跡を、前期ボードリヤール(1967-1979)と後期ボードリヤール(1980-)として、便宜上分けることができよう。

ところで、ポストモダニティの議論では、準拠枠(les référentiels)、意味=方向(sens)を欠いた記号、つまり、シミュレーションが論じられ(2.5参照)、称揚される。それらは要するに、哲学的にいえば、その背後で普遍的な実体とされる實在(réalité)と乖離した外見(apparence, appearance)が、想像に任せて、常に変化し続ける現象のことだろう。たとえば、インテリアや建築は、その実在(たとえば、インテリアをインテリアたらしめる意味)を欠いて、その外見を変容させていくといったようなことが、モノだけでなく、性現象、倫理、学術などあらゆる領域において生じていることが論じられるわけだ。そこでは、さらに、ハイパーリアリティ(hyperréalité)、内破(implosion)などの概念も用いられる。こうしたポストモダニティについての議論の萌芽は、実際には、最初期の社会理論的な書物である『モノの体系』にも見いだすことはできるが、シミュレーションなどの用語を本格的に導入して、上述のような内容の議論を詳細に行ったのは、おそらく『象徴交換と死』(1976=1992)からである。ただし、付言すると、そこでは、80年代以降のボードリヤールの議論とは違い、シミュレーションを「モダニティ(modernité, modernity)」の現象として議論し、さらに、それを称揚せず、むしろ、それに対して批判的な態度をとっているように見える。しかし、そうした現象をモダニティ、あるいは、ポストモダニティと呼ぶかは、ラベリングの問題であって、さらに、それに肯定的、または、否定的な態度をとるかは、社会理論上の政治的な戦略の問題であろう。したがって、資本主義につ

いてのボードリヤールの仮説を引き出すことを目的とする本稿にとっては、80年代以降のポストモダニティについての議論を十分に論じている、前期ボードリヤールに属する『象徴交換と死』までの議論を対象に検討すれば十分なのである。ちなみに、Kellner(1989)は、「ポスト1976(post 1976)」つまり、『象徴交換と死』(1976)以降という表現を使って、それ以降、ボードリヤールが、政治経済(économie politique)の問題から離れていったと見ている。確かに、それ以降、それまでのように、ボードリヤールが資本主義について、積極的に理論構築しているとはいえない。その意味でも、資本主義との関連でボードリヤールの議論を検討する場合、『象徴交換と死』までを検討すれば十分だろう。

こうして、本稿は、前期ボードリヤール(1967-1979)の12年間のうち、1968年の『モノの体系』から1976年の『象徴交換と死』までを扱うことになるのだが、それは、現在までつづく、社会理論家としてのボードリヤールの経歴からすると、初期に当たる。そのため、本稿では、これらの著作の時期を「初期ボードリヤール」と呼び、それについて検討することになるのである。

## 2 ボードリヤールによる資本主義の仮説

さて、以下では、『モノの体系』(2.1)、『消費社会』(2.2)、『記号の経済学批判』(2.3)、『生産の鏡』(2.4)、『象徴交換と死』(2.5)における、資本主義についての仮説を見ていく。そこでは、それぞれの著作の概要や主旨なども示すことで、どういう文脈で、資本主義の仮説が展開されているのかを理解できるようにしている。なお、本稿では、あくまでボードリヤールの資本主義の仮説を、引き出すことが目的であるため、その仮説の是非については検討しない。

### 2.1 モノの体系

本書は、モノの機能(fonction)や形態(forme)

が、伝統的な規範から解放され、さらに、相互に微妙な差異をもつにすぎなくなった「モデル (modèle)」としてのモノが、流行にしたがって、相互に連結され、「シリーズ (série)」を構成することを指摘する。そして、こうしたモノが「意味作用 (signification)」することで、社会的地位、威信などを、消費者にもたらすという意味で、モノが「人間化 = 擬人化 (personification)」し、また、そこに無意識が投射 (projection) され、さらに、こうした現象の背後に広告、生産の作用があることが、フロイト (Freud, S.)、バルト (Barthes, R.)、Riesman (1950)、Packard (1950, 1960)、Mumford (1934) らに依拠して議論される。

さて、このような議論において、ボードリヤールは、第4部「モノ、消費の社会 - イデオロギーのシステム (Le système socio-éologique des objets et de la consommation)」(Baudrillard 1968: 189-274=1980: 167-203)の「信用取引 = クレジット ("Le credit")」(Baudrillard 1968: 218-28=1980: 194-203)の章において、『浪費をつくり出す人々 (The Waste Makers)』(Packard 1960)に依拠して、クレジットを使った、現代の旺盛な消費行動を考察して以下のようにいう。「現代 = 近代の (moderne) 消費者が売買するのは、社会が生産し続けるためであり、また、消費者が働き続けることによって、[信用取引で 引用者] 買ったモノの支払いをできるようにするためである」(Baudrillard 1968: 221=1980: 199)。要するに、消費者がカード決済でモノを絶えず消費することで、生産は持続的に行われ、その生産現場では、労働者としての消費者が、カードの支払い日に備えて、賃労働に励む。そして、それによって生産されたモノを、消費者がカード決済でさらに消費することで、プロセスは循環していく。端的にいえば、「生産の秩序」(経済システム)は労働と消費との「共謀 (complicité) にもとづいて作動している」(Baudrillard 1968: 221=1980: 200)わけである。ボードリヤールは結論的に以下のようにいう。「生産の秩序は、まず、労働力の搾取によって存続する (vivre,

live)。だが、今日では、[労働と消費との]循環的な一致、つまり、これらの共謀によって、生産の秩序は自己を強化し(中略)したがって、持続可能なシステムとして[外部の機構に統制 = 管理されることなく]自律化する (s'autonomiser) ののである」(ibid.)。

本書では、たしかに、資本主義と明示し、それについて議論しているわけではない。しかし、引用が示唆するように、労働だけでなく、消費をも動員することで、経済システムが循環するという主張は、資本主義の作動についての見解として解釈することができるように思われる。

## 2.2 消費社会

ボードリヤールの刊行された著作は、論文集的な性質が強く、通常の学術的な体裁をとらないものが多い。その意味では、本書はわずかではあるが文献目録もあり、また、具体的なトピックから始まり、理論的叙述、個別テーマの考察へと展開していく構成になっているなど、通常、考えられる学術的な文献に近いといえよう。さらに、消費については、マクロ、ミクロの両方に配慮して叙述されている。本書の第2部「消費の理論 (Théorie de la consommation)」(Baudrillard 1970: 57-143=1995: 48-132)では、『モノの体系』で依拠した人たちの他に、サーリンズの「豊かな原始社会 ("La première société d'abondance")」(Sahlins [1968] 1972=1984)などを参照し、また、ガルブレイスの『新しい産業国家 (The New Industrial State)』(Galbraith [1967] 1978=1980)での主張、つまり、生産 = 供給サイドの技術官僚的なシステムである「テクノストラクチャ (technostructure)」が、欲求やその実現過程である消費に、「人為的な加速器 = アクセル (artificial accelerator)」を作動させているという批判的な主張を、記号論的に検討、洗練させている。要約すると、ボードリヤールによれば、ガルブレイスは、消費者に本来的に内在する欲求、消費が実在する (exister) とし、消費社会では、テクノストラクチャによって、そうした

欲求、消費が外部から統制 = 管理されている（「欲求 (besoins, needs) は生産の産物」）として非難している (Baudrillard 1970: 97-104=1995: 84-90)。周知のように、初期マルクスの労働の疎外論が典型であるが<sup>9)</sup>、人間本来の性質 (本質) が「外化 (対象化) される (objectivé)」ことで、自己にとって疎遠になる現象を「疎外 (aliénation)」という。その意味で、ガルブレイスは、「消費の疎外論者 (aliéniste de la consommation)」(Baudrillard 1970: 104=1995: 91) だというのがボードリヤールの見立てである。それに対し、ボードリヤールは、欲求ではなく、「欲求のシステム (système des besoins) が生産の産物」(Baudrillard 1970: 103=1995: 90) であり、欲求とは、欲求の「システムの要素として生みだされたもの」(Baudrillard 1970: 104=1995: 91) にすぎないという。では、欲求のシステムとは何か。それは、ボードリヤールによれば、近代の、あるいは資本主義的生産様式を生産の秩序 (経済システム) を構成する下位システムである、技術、投資・流通の交換システム、賃労働という「3つのシステムを補完する、合理的で、統合、制御された総体 (ensemble) としての需要、あるいは、生産力 (demande/fource productive)」(Baudrillard 1970: 104=1995: 90-1) だという。言い換えれば、資本主義の下位システム、つまり、技術、生産、金融、流通、労働などの各システムに相応する統制 = 管理された総体としての需要が、欲求のシステムであり、個々の欲求とは、そうした需要の一部ということになる。したがって、「生産の秩序 需要 = 欲求のシステム」というように展開する以上、『消費社会』のボードリヤールの議論では、本来的に欲求が、消費者個人に根ざすことはない。

ところで、ボードリヤールのこうした主張にもかかわらず、欲求が消費者個人に根ざさないということがありうるのか。人間には、たとえば、生理的欲求があって、どんな経済システムのもとであれ、そうした欲求に応じて、モノを消費するのであり、したがって、欲求、消費が個人に根ざさ

ないなどということは、ありえないように思われる。これについて、ボードリヤールは、『消費社会』で十分に論じず、脚注において、『国際社会学評論 (Cahiers internationaux de sociologie)』に掲載され、また、後に、『記号の経済学批判』に収められた論文「欲求のイデオロギー的生成 (“La genèse idéologique des besoins”）」(Baudrillard [1969] 1972: 59-94=1982: 54-91) を参照するよう指示している (Baudrillard 1970: 106=1975: 131)。ここで、この論文に深入りするつもりはないが、議論の概要についてのみ確認しよう。ボードリヤールは、おそらく、Sahlins ([1968] 1972=1984) やバタイユの蕩尽論を踏まえて (Bataille 1949=1973)、生理的欲求、あるいは、生きていくための「人類学的最低生活必要量 (物) (minimum vital anthropologique)」は実在しないとして、以下のようにいう。「あらゆる社会において、過剰への根本的な衝動が人類学的最低生活必要量 (物) を、残余として決定するのである。過剰とは、神的な領域、供犠的な部分、奢侈的な支出 = 費消 (depense, expenditure)、経済的利益 = 利潤である。奢侈 = 過剰 (luxe) をあらかじめ差し引くことによってこそ、[人間が] 延命するための [欲求、消費の] 水準が決まるのであって、その逆ではない

その逆は観念的な幻想である」(Baudrillard [1969] 1972: 84-5=1982: 80-1)。過剰が欲求、消費の水準を決定するというボードリヤールの仮説によれば、近代の資本主義的生産様式では、経済的利益 = 利潤という過剰の産出過程が、消費水準を決定することになり、それは、上述の『消費社会』の議論 (前段参照) を、一応、説明していることになる。また、欲求、消費水準がそのように決定されるのであれば、欲求とは個人に根ざすものではなく、集合的な現象であるといえよう。ボードリヤールはいう。「消費についての真実とは、消費が [モノの] 享受 (jouissance, enjoyment) として働くのではなく、生産として働く (fonction) のであり、したがって、それは、モノを生産することとまったく同様に、個人的ではなく

(中略) 集合的 だということだ」<sup>10)</sup> (Baudrillard 1970: 109=1992: 96)。欲求、消費が個人に根ざさないとする点で、ボードリヤールの消費論は、「消費の疎外論」(ガルブレイス)を乗り越えているし、それは、欲求、消費が、ある意味で、「社会的構築物 (social construct)」だということを含意するが、では、消費とは具体的にはどのようなものであり、生産の秩序はどのようにして欲求や消費をつくり出すのか。まず、前者については、ここで詳細に検討するまでもないだろう。それは、記号としてのモノの差異を消費することだ。引用で示せば、消費とは「記号の配列を行うシステム」(ibid.)であり、「消費のシステムは、最終的な審級(instance, determinant)として(中略)記号(記号としてのモノ(objets/signes))と差異のコード(code de différences)にもとづくのである」(Baudrillard 1970: 110=1995: 97)。では、生産の秩序は、記号=モノを配列することとしての消費を、どのように生み出すのか。具体的には、広告などのメディア(Baudrillard 1970:125-6, 192-3=1995: 112, 180-1)、『モノの体系』で確認したような信用取引(クレジットなど)を通じて(2.1参照)、消費者が、消費の仕方を学習することによってであろう。そして、こうしてたえず記号としてのモノの消費の仕方を学び、消費する社会こそが、ボードリヤールにとっての「消費社会(société de consommation)」なのである。実際、ボードリヤールはいう。消費社会とは「消費について習得し、社会的に訓練する社会」(Baudrillard 1970: 114=1995: 101)であると。このように、生産の秩序が、欲求、消費を統制=管理することで、高い生産性を目指し、拡大再生産が展開されることになる。ボードリヤールはいう。「生産と消費とは、生産諸力(forces productives)とそれらの統制=管理を拡大再生産(reproduction élargie)するという唯一の巨大な論理的過程にかかわるのである」(Baudrillard 1970: 115=1995: 102)。要するに、生産諸力の拡大再生産のために、労働とともに、生産の秩序によって、消費も動員されると

いうわけである。では、生産諸力とは何か。それは、マルクス主義的には、物質的財貨を生産する能力全般を指す概念であり、また、それを用いて財貨を生み出す形式が生産様式である。したがって、資本主義とは、生産様式の様態を示す概念だから、生産諸力の拡大再生産とは、資本主義の拡張を含意すると解釈してよいだろう。

### 2.3 記号の経済学批判

上で見てきた2つの文献では、マルクス主義の理論(概念、解釈)は、あまり明示的に論じられず、議論の後景として、その影響がうかがえるといった程度であったが、69年から*Communications*などに発表された諸論文を編んだ本書では、より抽象化、一般化した記号論的消費社会論をもとに、マルクス主義を批判的に補完すること(theoretical supplement)が目指される(水原 2003)。

先述した本書の「欲求のイデオロギーの生成(“La genèse idéologique des besoins”)(Baudrillard 1972: 59-94=1982: 54-91)の章では、(生理的)欲求のイデオロギー性、つまり、欲求が「社会的意識形態」、あるいは、観念に過ぎないことが論じられ(2.2参照)さらに、(生理的)欲求の対象である、モノの使用価値についても、同様のことが、「使用価値を超えて(“Au-delà de la valeur d’usage”)(Baudrillard 1972: 154-71=1982: 159-71)において示される。こうして、モノの表層、あるいは、外見、形態だけでなく、モノの機能、使用価値も、モノそれ自体に本来的に内在せず、なんらかの価値体系にもとづくという意味で、記号的な現象だということになる。そして、機能、形態としての記号=モノ、および、それへの欲求、消費が操作されることが、「デザインと環境、あるいは、政治経済の拡張=加速(“Design et environnement ou l’escalade de l’économie politique”)(Baudrillard 1972: 229-55=1982: 246-76)で論じられる。そして、同章で、以下のように、ボードリヤールはいう。機能、形態としての記号=モノの「消費のおかげで、システムは、人びとから力を

搾取するだけでなく、システムが継続的に延命 (survie, survival) できるように人々を動員することに成功したのである。それは著しい進歩ではある。だが、人びとの参加が途方もない規模であるとしても、それは、記号の水準においてであるに過ぎない。そして、そこにおいて、《新資本主義 (néo-capitalisme)》の全戦略は、その独自のもの、つまり、記号製造学 (sémiurugie) 操作的記号学 (sémiologie opérationnelle) において、巧みに結びつく (Baudrillard 1972: 250=1982: 269-70)。記号製造学、操作的記号学とは、おそらく、記号 = モノとそれへの欲求、消費をつくり出すことであり (ibid.) それは、具体的には、字義とおりに理解すれば、構想 = 創出 (plan and creation according to it) としての「デザイン (design)」である (ibid.)。そして、それが、人間の周囲の「自然 = 生活環境 (milieu)」を、記号とメッセージ (= モノ) のネットワーク *réseau* としての「環境 = 包囲 (environnement)」につくりかえるのだという (ibid.)。要するに、たとえば、近代の都市計画などのように構想にもとづいて、記号としてのモノからなる環境をつくり出し、人間を包囲する。さらに、ボードリヤールによれば、デザインとは、記号 [つまり、モノ] と人間との、記号相互の、記号を通じた人間相互のコミュニケーションを生産する最終的な決定審 (dernière instance) として分析されるとし (Baudrillard 1972: 251=1982: 270-1) 身体、性現象、人間・社会・政治の関係を含めたすべてがデザインされるのだと主張する (Baudrillard 1972: 252=1982: 271)。言い換えれば、上述のすべてが、記号、情報、メッセージといったもののコミュニケーションとして、構想 = 創出されるわけである。こうしたデザインの具体的な行為として、ボードリヤールは、マーケティング、マーチャンダイジングなどの社会工学部門に属する諸活動を挙げている (Baudrillard 1972: 250-2=1982: 270-1)。したがって、こうした社会工学的なデザインによって、記号としてのモノ、それへの欲求、消費がつくり出され、そうすることで、資本主義が延

命するというのが、本書における、ボードリヤールの資本主義についての主張ということになる。

#### 2.4 生産の鏡

マルクス、マルクス主義　たとえば、マルクス主義人類学の Godelier (1971) について、記号論、Sahlins ([1968] 1972=1984) の原始社会の経済についての人類学的研究、Castoriadis (1973=1991) Bataille (1949=1973) などの社会理論、さらに、Vernant (1965) の古代ギリシア研究に依拠して、批判、あるいは、否定することを目的に本書は書かれている。原書は200頁足らずであるにもかかわらず、広範な領域に議論が及んでいるため、議論が十分に尽くされているには見え、また、マルクス主義を否定するとして、それに代替するパースペクティブが十分に示されているには思われない。ともあれ、ボードリヤールの議論を要約すると、生産、労働、生産関係、生産様式といった概念やそれらを用いたマルクス主義の理論は、資本主義的生産様式のもとで生みだされ、また、そうした段階の社会においてのみ明確な指示対象をもつに過ぎない。したがって、そうした概念を普遍的なものとし、それを使って、前資本主義的段階や未開社会を考察し、さらには、未来社会を構想することはできないというのがボードリヤールの考えである。そして、本書の後半の「マルクス主義と政治経済システム ("Marxisme et le système de l'économie politique")」(Baudrillard 1973: 123-86=1981: 101-61) の章において、マルクスの『哲学の貧困』(Marx [1847] 1968=1950) における、「交換価値のシステムについての系譜学」という3つの史的段階図式が示される。つまり、余剰生産物だけが交換される第1段階(古代社会・封建社会) 産業的な物質的生産(物)(production matérielle industrielle)の全体が、交換において疎外 = 売買される(s'aliéner) 第2段階(資本主義政治経済) そして、美德(vertu) 愛、知識、良心といった、分け合うこと



はあっても、交換できない、したがって、疎外 = 売買できないと思われていたすべてが、交換価値の領域に入る第3段階からなる図式である (Marx 1847: 6-7=1950 16-7; Baudrillard 1973: 134=1981: 109-10)。ボードリヤールによれば、『哲学の貧困』のマルクスは、第1段階から第2段階への移行に、「資本の生成」、「交換価値の[領域的な]拡張」、そして、「その社会的諸関係への影響」などによる「決定的な変容 (mutation)」を認めるが (Baudrillard 1973: 134=1981: 110)。しかし、第2段階から第3段階への移行には、「ある種の拡大効果だけを見る」(ibid.)。反対に、ボードリヤールは第2段階と第3段階との間に「決定的な変容」を見ている (ibid.)。ボードリヤールによれば、マルクスは、市場交換される「文化、消費、情報、イデオロギー、性」について、商品、搾取、利潤、貨幣といった「資本主義的に墮落 (prostitution capitaliste) した用語」で批判 (critique) する。しかし、それらの用語は第2段階、つまり、資本主義下での物質的生産を説明するには価値をもつが、文化的なものが生産、市場交換される第3段階では、「隠喩的な意味づけ (référence métaphorique)」としてしか役立たないという (Baudrillard 1973: 135=1981: 111)。こうして、ボードリヤールは、第3段階は、マルクス主義の用語、理論によってではなく、記号論的に説明する必要があると主張する。つまり、第3段階では、商品形態 (forme/marchandise) は記号形態 (forme/signe) へと、[貨幣システムによる] 一般的等価法則 (loi de l'équivalence générale) のもとで、物的生産物を[交換価値 = 価格として] 抽象することから、[示差的对立 (opposition distinctive) にもとづく] コードの法則 (loi du code) のもとで、あらゆる交換を操作することへの変容があったのだと (Baudrillard 1973: 136-7=1981: 112)。そして、たとえば、単なる物的なモノではなく、記号 = モノと、それに対する需要 = 欲求 (la demande, c'est-à-dire les besoins) は経済システムによって統制 = 管理された「シミュレーション・モデル (modèle

de simulation)。(後述、2.5も参照) になることが示唆される (Baudrillard 1973: 142=1981: 117)。こうして、1.4 で見たようなポストモダニティ的な主張 (シミュレーションについての議論) をする。つまり、そうした記号 = モノへの需要 = 欲求、消費が、階級などの社会的な「実在 = 現実 (réalité)」に根ざして、ヴェブレン (Veblen, T. B.) 的に、社会的威信 (prestige)、卓越 (distinction) などを表象 = 再現する「記号作用の古典的時代 (l'ère classique de la signification)」は終わり、記号表現 (signifiant) が戯れることを目的として、記号内容 (signifié)、指示対象は消滅し、コードは (社会的な) 実在 = 現実にはなく、それ固有の [差異の] 論理に根ざすことになる。そして、記号はそれ自体が指示対象となり、他に何も指示することはない。こうして、コードは、指示対象の絶対的な審級 (l'instance de référence absolue) となり、また同時に、屈折した欲望の対象となるのだという (Baudrillard 1973: 143-4: 1981: 118-9)。要するに、システムに統制 = 管理された「消費需要 (demande de consommation)」は、純粋な「記号の戯れ (jeu des signes)」になるわけだ (Baudrillard 1973: 141-2=1981: 117)。以上のような、消費の記号化についての議論を踏まえ、また、『資本論』([1867-94] 1962-4=1969-70) の議論に対する1つの解釈、つまり、資本主義は、過剰生産によって、周期的な恐慌に陥り、それを契機に階級闘争が激化し、破綻するという解釈を踏まえて<sup>11)</sup>、ボードリヤールは以下のようにいう。「1929年の恐慌は麻痺的な段階を示している。つまり、生産することは、もはや本質的なことではなく、[生産したモノを] 売りさばくことが本質的である。消費は戦略的な要素となり、それ以降、人びとは消費者として動員され、人々の欲求は彼らの労働力と同じように本質的になった。こうした操作によって、システムは、信じられない規模で経済的な延命 (survie économique) を確実にするのである」(Baudrillard 1973: 161=1981: 135)。ここでは、より明確に、記号化した消費によって、資本主義経

済が延命するという仮説が展開されているといえよう。

## 2.5 象徴交換と死

6部構成からなり大著といってよい本書は、概ね、2つの部分から構成されているように思われる。1つは、2.4で見た『生産の鏡』におけるシミュレーション、あるいは、実在を欠いた記号=モノやそれへの欲求、消費、さらには、そうしたシミュレーションからなる環境=包囲についての議論である。第1部「生産の終焉 (*La fin de la production*)」(Baudrillard 1976: 15-74=1992: 23-116)から第3部「モード、あるいは、コードの夢幻劇 (*La mode ou la féerie du code*)」(Baudrillard 1976: 129-52=1992: 209-42)まで。もう1つは、理論的な試みであり、ボードリヤールは、それを「理論的暴力 (*violence théorique*)」(Baudrillard 1972: 8=1992: 13)と呼ぶ。それは、端的には、2.4で見たマルクス、マルクス主義に対して行ったことを、精神分析学(フロイト)、構造人類学、あるいは民俗学、そして、構造言語学(ソシュール)について行うことだといえよう。第4部「身体、あるいは、記号の殺戮場=屍体置場 (*Le corps ou le charnier de signe*)」(Baudrillard 1976: 153-189=1992: 243-300)から第6部「神の名の根絶=脱・頂化 (*L'extermination du nom de Dieu*)」(Baudrillard 1976: 283-343=1992: 449-552)まで。このうち、本稿にとって関心があるのは、前者の議論であり、本書の第1部「生産の終焉」の、「労働」、「賃金」など4つの節からなる「生産の終焉」、「シミュレーション・モデルとしての政治経済学 (*L'économie politique comme modèle de simulation*)」、「労働と死 (*Le travail et la mort*)」などの章が、それに該当する。以下では、これらを、その前後の議論を踏まえて検討し、資本主義についての仮説を取り出すことになる。だが、本書は、これまでの議論とは異なり、独特な概念や仮説が展開され、その上で、資本主義について検討される。そのため、こうした議論の概要を確認してから本題につ

いて検討することにしよう。

### 2.5.1 価値法則

ボードリヤールは第1部「生産の終焉」の第1章「価値の構造革命 (*La révolution structurale de la valeur*)」、続く、第2章「生産の終焉」において、「価値法則 (*loi de la valeur*)」の系譜学を展開している。それによると、価値法則には3つの段階があり、「自然的価値法則 (*loi naturelle de la valeur*)」(ルネサンス~産業革命まで)、「商品的価値法則 (*loi marchande de la valeur*)」(産業革命期)、「構造的価値法則 (*loi structurale de la valeur*)」(現段階)からなるという。そして、各段階における、価値の源泉、準拠枠 (*référence*)、指示対象 (*référence*) が指摘される<sup>12)</sup>。以下、それぞれ確認しておこう。

#### 2.5.1.1 自然的価値法則

自然的価値法則における価値の源泉、準拠枠は、「自然 (*nature*)」である。重農主義者がそうであったように、価値は自然からの恩恵 (*gratification*) と見なされる (Baudrillard 1976: 22=1992: 31)。また、自然という「尽きることのない準拠実体 (*substance référentielle inépuisable*)」に結びついているため、そこから [貨幣価値 (価格) のような] 価値形態 (*forme*) を引き出すことはできない (Baudrillard 1976: 22=1992: 31)。では、そこでの価値の指示対象とは何かというと、ボードリヤールはこれについては言及していないように思われるが、価値形態がない以上、その指示対象は存在しないのかもしれないが断定はできない。

#### 2.5.1.2 商品的価値法則

次に、商品的価値法則についてであるが、まず、自然的価値法則から商品的価値法則への移行は何によって生じたのかを確認すると、産業革命以降、価値が生産されるようになって、移行したという (Baudrillard 1976: 22=1992: 31)。したがっ

て、商品的価値法則における価値の源泉、準拠枠は労働となる。そして、[貨幣システムによって相対的に測定された]労働時間(交換価値)を準拠枠として、価値が測定されることになる。さらに、こうした価値の指示対象は、使用価値、あるいは実在(réalité)となる。ところで、こうしたボードリヤールの商品的価値法則についての解釈は、実際には、ソシュール(Saussure, F.)の構造言語学についてのボードリヤールの独特な解釈を、パラフレーズしたものである(Baudrillard 1976: 17-8=1992: 24-5)。つまり、交換価値は、記号システムにおける諸項(termes)間の「示差的な対立」に、使用価値とは、諸項の記号表現が回付される(signification)記号内容に対応する。そして、ボードリヤールは、前者の諸項の相対的な「示差的対立」にもとづく価値を「構造的次元(dimension structurale)」の価値とし、記号表現が回付される記号内容を「機能的次元(dimension fonctionnelle)」における価値として定義する(Baudrillard 1976: 17-8=1992: 24-5)。そして、機能的次元の価値である記号内容は、構造的次元の価値に「目的=合目的性(finalité)」を与えるという。したがって、これを商品的価値法則に適用すると、使用価値、あるいは、社会的実在は、記号論的には、機能的次元に属し、それは構造的次元に属する交換価値に究極的な目的=合目的性を与えることになる。以上の議論は要するに、商品であれ記号であれ、構造的次元では相対的な価値でしかないが、それが具体的な場面=状況(situation)では、何らかの意味、有用性、社会的地位(実在)などとして機能するのであり、後者は、前者に対して、具体的な目的を与えるということだろう。

### 2.5.1.3 構造的価値法則

ところが、こうした商品的価値法則は、資本によって、構造的価値法則に変容していくという(Baudrillard 1976: 20=1992: 29)では、構造的価値法則のもとでの価値の源泉、準拠枠とは何か。

ボードリヤールは以下のようにいう。そこでは「価値が構造的に戯れる(jeu)ことが目的となり、指示対象的な価値(valeur référentielle)は消滅する。そして、構造的次元が自立し、指示対象の次元(dimension référentielle)は排除される」(Baudrillard 1976: 18=1992: 25)。指示対象的な価値、指示対象の次元とは、商品的価値法則における、使用価値、実在を、構造言語学においては、記号内容を、おそらく指すように思われる(2.5.1.2参照)。そして、これらが、消滅、排除された後に残るのは、商品的価値法則にあっては、交換価値、構造言語学においては、記号表現だけである。言い換えれば、商品の価格、項の形態の相対的な示差的な対立にもとづく価値だけが残される。以上のことを踏まえると、構造的価値法則における価値の源泉、準拠枠とは何か。これについてボードリヤールは明示的に述べてはいないが、「コード(code、記号システム)」ということになろう。要するに、価格、形態などの示差的な対立が価値を生む以上、そうした差異からなる構造(code)あるいはその規約(code)こそが、価値源泉であり、準拠枠だといえよう。そして、コードにもとづいて、諸項は、使用価値や実在に拘束されることなく、全面的に相対的になり、相互に置き換えられ、組み合わせられることになる(ibid.)。これがボードリヤールのいう「シミュレーション」である(Baudrillard 1976: 18=1992: 25-6)。ここで2つ確認すべきことがある。1つは、コードの「非決定=不確定性(indétermination)」、 「無力化=中性化作用(neutralisation)」、 「中立性(indifférence)」について。もう1つは、価格、あるいは、交換価値、そして、商品の、構造的価値法則における扱いについてである。まず、前者のコードについて見ていこう。コードを、本稿では、先述したように、諸項の示差的な対立構造、あるいは、その規約程度の意味で解釈しているが、そうしたコードにもとづく、諸項の置き換えや組合せは、実在に拘束されないために、不確定な(indécirable)ものである(Baudrillard 1976: 18,

21=1992: 26, 29)。したがって、そこでは、「人間主義の偉大な価値基準、道徳、美学、行動についての判断にかかわる、あらゆる文明化の基準は、すべて、イメージと記号のシステムのなかで消滅する」(Baudrillard 1976: 21=1992: 29)のである。ボードリヤールはいう。コードにおいては「すべては決定不能(indécirable)になるが、それはコードの支配の特徴的な効果であり、コードは、どこにおいてであれ、中性化=無力化、中立化という原理にもとづく」(ibid.)と。次に、交換価値=価格の扱いであるが、これは、構造的価値法則ではなく、商品的価値法則における価値の準拠枠である労働、あるいは労働時間を「貨幣システム」によって測定したものであった。しかし、構造的価値法則にあっては、準拠枠は、コードであって、そこでは、諸項の示差的な対立が価値を生むのだから、労働は商品の交換価値=価格の準拠枠ではなく、商品の交換価値は、諸項としての商品相互の示差的対立によってのみ、生みだされるだろう。そうであれば、構造的価値法則における交換価値=価格とは、諸項、あるいは記号の相互に示差的な価値の一様態でしかないのである。

## 2.5.2 構造的価値法則における資本主義仮説

さて、シミュレーション、あるいは、構造的価値法則の段階についての議論の概要を見てきた。これによって、そこでの資本主義についてのボードリヤールの議論を見通す準備ができた。以下では、この点について見ていこう。

2.5.1.3の議論では、構造的価値法則において、労働は、価値の源泉、準拠枠ではない。では、もはや労働は存在しないのかということそうではない。労働は記号となるのである。ボードリヤールはいう。「労働と生産は、もはや、記号としてしか働かない。したがって、それは、非労働的な行為(non-travail)、消費、コミュニケーションと代替=置き換え可能な項(termes commutables)としてしか働かない」(Baudrillard 1976: 25=1992: 36)。これは、労働が、その他の行為と代替可能

である以上、労働以外のすべての行為もまた記号であることを含意する。これについては後述。では、労働を含めた行為をする人間はどうか。これも例外ではないのであり、記号、あるいは項=端末(terme)となる。引用すると、「人々(vous)に求められているのは、生産することや努力によって自己を乗り越えることではなく(中略)自己を社会化することである。それは、現在、全社会的な規模の広がりをもつ構造上の規定にしたがって、[人々が]相互に区別された各項としての価値以外、他にとることはないということである」(ibid.)。また、記号としての人間は、他の記号がそうであるように、置き換えられ、組み合わせられる。こうして、各人は、「[人々の]全ネットワーク(tout le réseau)の端末(terminal)であり、取るに足らない項=端末(terme)」となる。(Baudrillard 1976: 28=1992: 42)。では、生産とはどのような行為なのか。ボードリヤールはまず、労働力を「ひとつの定義=規定、公理=基本原理」だとし、その「《使用価値》は、[資本が]コードを操作するなかで、その定義が自己を分身化(redoublement)することに他ならない」(Baudrillard 1976: 26=1992: 38)という。さらに、こうした労働力とは、「自然を価値へと操作する記号であり、この操作によって生産は定義される」(Baudrillard 1976: 26-7=1992: 38)という。一見、何のことが判然としない文だが、何のことはない。各労働者は、それぞれ、素材を加工してモノをつくり出したり、生産設備を操作するなどの技能をもつ。端的にこれを労働力とすれば、労働者間で労働力には示差的対立、つまり、差異があり、それがコードである。そうした示差的に異なる労働力をもつ労働者を、資本は組合せ、労働力の使用価値を發揮させる。つまり、それは、労働力を対象化することであって、それが、「労働力の分身化」ということなのだろう。こうして、記号=モノが生産されることになる。ボードリヤールはいう。モノを「記号化(marquer)のために生産する」(Baudrillard 1976: 27=1992: 39)のだと。ここで、1つ確認す

べきことがある。先述したように、労働はそれ以外の行為、たとえば消費などと代替可能なはずである。そうであれば、それらの行為も資本によって、組み合わせられ、置き換えられることになる。さらにいえば、こうした行為は、上述の意味で資本に支配されているとすれば、労働とさえいつてよいだろう。ボードリヤールは以下のようにいう。「労働 余暇の形態も含め は、遍在するコードにしたがって、基本的抑圧、統制 = 管理、決められた時や場所での永続する活動 = 仕事 (occupation) として、全生活を埋め尽くす。人々をいたるところで、学校、工場、ビーチ、テレビの前、あるいは、再訓練の場に配置しなければならない それは、全般的で永続的な [人々の] 動員である」( Baudrillard 1976: 28=1992: 41 )。このように、社会のすべてが、資本に支配されているというのが、その是非はともかく、ボードリヤールの解釈である。

### 2.5.3 経済学批判要綱

上述のような解釈をボードリヤールは、マルクスの『経済学批判要綱』( Marx [1858-9] 1953=1959-65, 1973 ) を引用して説明している。マルクス学における学説研究に本稿の関心はないが、ここで、この文献について、若干確認しておこう。この書物(草稿)がはじめて刊行されたのは、1939年、モスクワにおいてである<sup>13)</sup>。それは、貨幣と資本という2つのテーマについて議論する。そして、「資本の章(“The Chapter on Capital”）」には、後の『資本論』とは明らかに対立する記述が見られ、それは現代の大工業が発達した資本主義を説明するのに有効であると思われるため、多くの文献で頻りに引用されている (Poster 1990=2001: 66-7; Jameson 1991: 272 )。本稿が取り上げている『象徴交換と死』も、そうした文献に属するものだといえよう。なお、『生産の鏡』、『象徴交換と死』、たとえば、後者の議論でいえば、確かに、マルクス、マルクス主義は商品的価値法則を説明するのに適合するに過ぎず、現段階の構造

的価値法則を説明できないとして、批判、否定された。しかし、『経済学批判要綱』は、『構造的価値法則』のもとでの資本主義、あるいは資本による支配を説明するために、持ち出されている以上、ボードリヤールは、結局、マルクスと決別したとはいえないのだろう。それは、ポストモダニティについて議論するボードリヤールと『経済学批判要綱』のマルクスとが親和的であることを示しているように思われる。

さて、構造的価値法則の段階においては、商品的価値法則とは異なり、労働ではなく、コードが、価値の源泉、準拠枠となった。他方、『資本論』では、価値、その現象形態である交換価値と使用価値は労働によって作り出される。正確に言えば、価値(交換価値)は労働時間としての抽象的人間労働の属性において、使用価値は具体的有用労働の属性において生産される( Marx [1867] 1962= 1969a: 85 )。したがって、たとえば、「機械装置は価値を創造しない」( Marx [1867] 1962=1962b: 349 ) のであった。しかし、『象徴交換と死』が引用する『経済学批判要綱』によれば、「[大工業が進んだ段階では]生産過程は、主たる単位 (governing unity) としての労働が、優位 = 支配的な過程という意味での労働過程であることを止めている」( Marx [1858-9] 1953=1961: 645, 1973: 693; Baudrillard 1976: 30=1992: 44 )。では何が生産をするのか。『象徴交換と死』の引用する『経済学批判要綱』によれば、それは、人間の具体的な労働生理的な意味での労働力の支出 ( Marx [1867] 1962=1969a: 85 ) あるいは、「生きた労働 ( travail vivant )」ではない。「蓄積された知識、技能、そして、社会的頭脳 ( social brain ) という一般的な生産力が ( 中略 ) 資本に取り込まれて、労働と対立し、さらに、[このように資本に取り込まれた] そうした蓄積は、資本の、とりわけ固定資本の特徴として現れる」( Marx [1858-1859] 1953=1961: 646, 1973: 694; Baudrillard 1976: 29-30=1992: 44 )。こうした資本、つまり ニュアンスや意味上の相違を気にせず、あえて言い換えれば、「対象

化された労働 ( travail objectif )<sub>1</sub>、「死んだ労働 ( travail mort )」<sub>1</sub>「機械装置 ( machinerie )<sub>1</sub>、あるいは「固定資本 ( capital fix )」こそが、生産過程の中心的な役割を果たすのである。そして、ボードリヤールによれば、こうした資本、あるいは「集合的な機械装置 ( machinerie collective )」は、「生産の」社会的な目的 = 合目的性を生みだし、したがって、生産を「自己目的的に」生み出すのである」( Baudrillard 1976: 30=1992: 44 ) ボードリヤールはこれを「生きた働に対する死んだ労働の支配 = 覇権」( ibid. )という。では、労働とはそこではどんな役割を果たすのか。構造的価値法則では、労働は記号化し、相互に、または、その他の記号としての行為と自由に、組み合わせられ、置き換えられるのであった。ボードリヤールは『経済学批判要綱』を引用する。「労働者は生産過程の主要な役割ではなく、その過程の脇に押し出される」( Marx [1858-1859] 1953=1961: 654, 1973: 705; Baudrillard 1976: 30=1992: 45 ) この箇所では、マルクスは、大工業化の過程で、労働がサービス化していくことを、おそらく論じているのだが( Marx [1858-1859] 1953=1961: 654, 1973: 705 ) 同様に、ボードリヤールもサービスとして労働 ( travail / service ) について議論している ( Baudrillard 1976: 31-5=1992: 47-51 )。ともあれ、確認すべきは、労働のサービス化と、構造的価値法則における記号として労働との関連である。『経済学批判要綱』のマルクスは、巨大な機械装置による生産過程に対して、人間は監視者 ( watchman )、管理者 ( regulator ) として、ますます関係するようになるという。これは、要するに、生産過程において、示差的に異なる労働力をもつ記号としての労働者を、機械装置の周囲に、資本が自由に組合せ、また必要に応じて、置き換えることを意味するよう思われる。このように理解すれば、確かに、『経済学批判要綱』の議論は、構造的価値法則における、生産、労働を具体的に説明しているといえよう。

#### 2.5.4 資本主義仮説

ところで、構造的価値法則では、資本によって、労働は、それ以外の行為と代替可能なものとなる。そのため、労働と労働以外の行為とは、ほとんど区別のつかないものとなるのであった。この点について、ボードリヤールは「賃金 ( ' Le salaire ' )」の節において以下のようにいう。「搾取としての賃金制は終焉し、資本という社会 = 会社 ( société du capital ) の株主制としての賃金制 [ 要するに、消費者 / 労働者への投資としての賃金制 ] がはじまる。それは労働者の戦略的な機能が、社会的に義務づけられたサービスとしての消費に移行することである ( 中略 ) 資本は労働者に賃金を与え = 投資し ( investir ) また ( 中略 ) 労働者を包囲する ( investir )。資本は労働者の隅々まで占拠する」( Baudrillard 1976: 37=1992: 53 )。ここでは、労働以外の行為、特に、消費について、賃金制とのかかわりで、比喩的な説明がされている。それによれば、繰り返しになるが、消費を含めたすべての行為が資本に管理されているというわけだ。こうして、ボードリヤールは、明示してはいないが、構造的価値法則の段階における資本主義について述べる。長いが引用したい。

生産とすべての [ 独自の ] 社会的な目的 = 合目的性とは切り離され、生産は成長段階に入る。成長とはこうした意味で解釈されるべきであり、つまり、それは加速としてではなく、生産の終焉を特徴づけるものとして解釈しなければならない。生産の終焉は、生産と、相対的に偶然的で自律的な消費との間における顕著な差によって特徴づけられていた。しかしながら、消費が文字どおり管理される ( 中略 ) 時から ( 29 年の恐慌以降、特に、第 2 次大戦以降 ) 生産と消費が独自に決定されることも、固有の目的をもつことはもはやなくなる段階に入る ( Baudrillard 1976: 39=1992: 56 )。

ここでは、生産、あるいは経済の終焉が、生産と消費、したがって、需給の不均衡、つまり、過

剰生産による、生産の危機として生じるのではなく、生産と消費とが資本に統制＝管理されることで新たな段階に入ることが指摘されているのだと思われる。これが、『象徴交換と死』で展開された構造的価値法則、あるいは、シミュレーションの段階における、資本主義の作動に関する仮説だといえよう。

### 3 結論

さて、2では、『モノの体系』から『象徴交換と死』までの資本主義の仮説を取り出す作業を行った。そこでの一貫した特徴とは、「資本、あるいは、生産の秩序による消費の記号化とその統制＝管理、そして、労働者としてだけでなく、消費者としての人々の動員による資本主義の延命(survie)」という考え方である(2を参照)。もちろん、本稿の後半で扱った文献になると、記号が社会的な実在を欠いて戯れるといった主張が、目立つようになる。したがって、記号＝モノの特徴についての解釈＝仮説には、文献ごとに違いがあるように思われる。

ところで、上述のような仮説については、今後、検証などいくつかの作業が必要である。だが、もちろん、こうした仮説検証には先行研究があり、たとえば、McCracken(1988=1989: 119-24)は、消費の記号化について実験的な手法で行い、否定的な結論にいたっている。さらに、間々田(2000: 157-190)は、記号＝モノの消費(記号消費)がどの程度、資本によって統制＝管理されるのか、あるいは、それによって、消費需要は増大するのかについて検討し、やはり、否定的な結論にいたっている。確かに、これらの先行研究は、明確に消費の記号化を定義した上で、検討している点で優れたものではある。しかし、ボードリヤールの議論を必ずしも、十分に検討しているとはいえない。たとえば、間々田はモノの機能、あるいは、使用価値を記号として扱っていない。だが、特に、『記号の経済学批判』の議論では(2.3

参照) 使用価値もまた、記号現象に含めている。したがって、ボードリヤールの議論、仮説についていえば、これらの先行研究は、不十分だと思われる<sup>14)</sup>。

ところで、上述のことと関連するが、本稿の文献サーベイでは、記号概念の内包(性質)とその外延(適用範囲)について、十分に検討できなかった。これは、差異化概念についても同様である。こうした概念についても、文献を精査して、明確化しなければ、ボードリヤールの資本主義についての仮説の内容も、はっきりしないだろう。こうした作業も今後の課題である。さらに、本稿では、『象徴交換と死』の理論的概要を現状で可能な限り詳細にサーベイしたが、「準拠枠」、「指示対象」、「実在」、「記号表現」などの概念の相関関係を、あまり明瞭には示すことができなかったのではないかという印象がある。これもやはり、記号概念についての整理に問題があるためだと思われる。このように本稿には、少なくない問題があり、議論はあくまで試論の域を出るものでない。したがって、これを橋頭堡として、今後、さらに研究を進める必要があるだろう。それでも、初期ボードリヤールについて、一貫した資本主義の仮説を抽出できたのだから、本稿の意図はそれなりに果たせたように思われる。

#### [注]

- 1) 邦訳は『物の体系』。「物」を本稿では「モノ」とカタカナ表記しているが、とりたてて意味があるわけではないが、しいていえば、「物」という言葉は物理的な性質を含意するように思われるため、これまで拙稿では、「モノ」と表記してきた。なお、原題では、objets (objects) となっている。
- 2) 邦訳は『消費社会の神話の構造』。
- 3) ボードリヤールの業績、ボードリヤールについての先行研究については、カリフォルニア大学アーバイン(Irvine)校(UCI)の図書館による「批判理論リソース(The UC Irvine Critical Theory Resource)」の「ウェレック図書館講演者文献目録

- (The Welles Library Lecturer Bibliographies)」を参照した。日仏英語他のもも含むこの目録の書誌情報は、ボードリヤールの著作、ボードリヤールについての(書評論文を含む)著作などの2次文献を含め、きわめて詳細で、確認した限りでは、情報の信頼性も確かで、使い勝手もよい(The Welles Library Lecturer Bibliographies, <http://sun3.lib.uci.edu/~scctr/Wellek/>, 2003.11.10)。また、文献では、Kellner(1989) Gane(1993)の文献目録が詳細である。なお、こうしたリソースをもとに先行研究を本節では概観しているが、内容的な記述は十分とはいえ、今後、改めて詳述することにしたい。
- 4) こうしたタイプの先行研究は、当然ながら、海外にも多数あるが、たとえば、Bocock(1993) McCracken(1988=1989)など、海外の研究については、本文前段で見たようにあくまで学説研究に限って記述した。
- 5) ボードリヤールは、経済システムという用語を使わず、それに当たる用語として「生産の秩序(ordre de production)」(Baudrillard 1968: 224=1980: 200)、資本主義、「システム(système)」(ibid.)などの用語を用いている。これらの用語の間には、意味、ニュアンスの違いはあるように思われるが、本稿では、同一のもとして扱っている。
- 6) 1956年にブレヒト(Brecht, B.)の『亡命者の対話(Flüchtlingsgespräche)』の仏訳を行い(Brecht [1940] 1998=1956) 60年代に入ってから、当時、サルトル(Sartre, J.)らで著名だった*Les temps modernes*(『現代(レ・タン・モデルヌ)』)誌に、米国の作家スタイロン(Styron, W.)の『この家に火を放つ(See This House on Fire)』(Styron [1960] 1993)についての書評論文(Baudrillard 1962a= 2001) イタリアの幻想文学作家カルヴィーノ(Calvino, I.)についての批評などを寄せ(1962b= 2001)。60年代の中頃には、ヴァイス(Weiss, P.)の『マラー/サド(Marat/Sade)』などの仏訳をしている(Weiss 1964=1965)。
- 7) 最近の活動についていえば、2001年9月11日の大規模同時多発テロ事件以降の世界情勢につい

て考察した『権力の地獄絵(Power inferno)』

邦題『パワー・インフェルノ』(Baudrillard 2002=2003) さらに、*Le nouvel observateur*(『新観察者』)誌における、『マトリックス(Matrix)』(1999-2003, Warner Bros.)についてのコメント(インタビュー記事)などがある(Baudrillard 2003= 2003)。

- 8) 引用文における[ ]は引用者による挿入であり、以下、同様。なお、仏英語文献からの引用文の訳は原則として筆者による。その他、マルクスの独語からの引用も英/仏語訳を参照して、邦訳の一部を変えている。以上のことから、本稿で引用する訳文は、文献注で指示した邦訳とは必ずしも一致しない。
- 9) マルクスが疎外論を展開したのは、『ドイツ・イデオロギー』(Marx and Engels [1845-6] 1958= 2002)における「認識論的切断(coupe épistémologique)」(アルチュセール)以前であり、たとえば、『経済学・哲学草稿』(Marx [1844] 1990=1964: 84-106)においてである。
- 10) は原文ではイタリック。以下、同様。
- 11) これについては、以前、詳細に検討している(水原 2003: 165-6)。
- 12) 邦訳では、référenceを座標系、指示対象と訳しわけているが、もちろん、原書では、référenceという一語だけが使われているに過ぎない。だが、本稿や邦訳のように、この語を少なくとも、2つの意味的に異なる、あるいは、水準の異なる概念として扱わないと議論は混乱してしまうように思われる。
- 13) 『経済学批判要綱』についてはMacLellan(1970)を参照。
- 14) 水原(2001)でも、おもに官庁のマクロ統計から。記号消費によって資本主義は延命、あるいは成長しているのかを検討したが、そこでも、使用価値の扱いは十分検討されているとはいえない。



[ 文 献 ]

Bataille, G., 1949, *La Part Maudite*, Paris: Minit. (=1973, 生田耕作訳『呪われた部分』二見書房.)

Baudrillard, J., 2003, "Baudrillard décode <<Matrix>>," *Le Nouvel Observateur*, (2015, du 19 au 25 Juin) : 54-6. (=2003, 中山元訳「マトリックスの解読」『哲学クロニクル』(391, 30 July), <http://nakayama.org/polylogos/chronique/>, 2003. 8. 20.) \* インタビュー .

, 2002, *Power inferno*, Paris: Galilée. (=2003, 塚原史訳『パワー・インフェルノ グローバル・パワーとテロリズム』NTT出版.)

, 2001, Genosko, G. ed., *The Uncollected Baudrillard*, London: Sage.

, 1993, Gane, M. ed., *Baudrillard Live: Selected Interviews*, London: Routledge.

, 1981, *Simulacres et simulation*, Paris: Galilée. (=1984, 竹原あき子訳『シミュラクルとシミュレーション』法政大学出版局, 1994, trans. Glaser, S. F., *Simulacra and Simulation*, Ann Arbor: University of Michigan Press.)

, 1980, "La fin de la modernité ou l'ère de la simulation," *Encyclopædia Universalis*, vol.17, 26-35.

, 1976, *L'Échange symbolique et la mort*, Paris: Gallimard. (=1982] 1992, 今村仁司・塚原史訳『象徴交換と死』筑摩書房.)

, 1973, *Le miroir de la production*, Paris: Casterman. (=1981, 宇波彰・今村仁司訳『生産の鏡』法政大学出版局.)

, 1972, *Pour une critique de l'économie politique du signe*, Paris: Gallimard. (=1982, 宇波彰・今村仁司・桜井哲夫訳『記号の経済学批判』法政大学出版局, 1981, trans. Levin, C., *For a Critique of the Political Economy of the Sign*, St. Louis: Telos.)

, 1970, *La société de consommation: ses mythes, ses structures*, Paris: Denoël. (=1979] 1995, 今

村仁司・塚原史訳『消費社会の神話と構造』紀伊國屋書店.)

, [1969] 1972, "La genèse idéologique des besoins," Baudrillard, J., *Pour une critique de l'économie politique du signe*, Paris: Gallimard, 59-94. (=1982, 宇波彰・今村仁司・桜井哲夫訳『記号の経済学批判』法政大学出版局, 54-91.)

, 1968, *Le système des objets*, Paris: Gallimard. (=1980, 宇波彰訳『物の体系』法政大学出版局, 1996, trans. Benedict, J., *The System of Objects*, New York: Verso.)

, 1967, "Compte rendu de Marshall McLuhan: *Understanding Media*," *L'homme et la société*, (5) 227-30. (=2001, trans. Gane, M., "Review of Marshall McLuhan's *Understanding Media*," Genosko, G. ed., *The Uncollected Baudrillard*, London: Sage, 39-44.)

, 1962a, "La proie des flammes," *Les temps modernes*, 17 (193) 1928-37. (=2001, trans. Matiation, N., "Review of William Styron's *Set This House on Fire*," Genosko, G. ed., *The Uncollected Baudrillard*, London: Sage, 18-24.)

, 1962b, "Les romans d'Italo Calvino," *Les temps modernes*, 17 (192) 1728-34. (=2001, trans. Thomas, S., *The Novels of Italo Calvino*, Genosko, G. ed., *The Uncollected Baudrillard*, London: Sage, 13-7.)

Best, S. and Kellner, D., 1997, *The Postmodern Turn*, New York: Guilford Press.

, 1991, *Postmodern Theory: Critical Interrogations*, New York: Guilford Press.

Bocock, R., 1993, *Consumption*, London: Routledge.

Brecht, B., [1940] 1998, *Flüchtlingsgespräche*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=1956, trad. Baudrillard, J. and Badia, G., *Dialogues d'exiles*, Paris: L'Arche, 1963 野村脩訳『亡命者の対話』現代思潮社.)

Butler, R., 1999, *Jean Baudrillard: The Defence of the*

- Real*, London: Sage.
- Castoriadis, C. 1973, *Socialisme ou barbarie*, Paris: Union generale d'editions. (=1991, 江口幹訳『社会主義か野蛮か』法政大学出版局.)
- Dichter, E., 1958, *The Strategy of Desire*, New York: Garland Pub. (=1964, 多湖輝訳『欲望を創り出す戦略』ダイヤモンド社.)
- Galbraith, J. K., [1967] 1978, *The New Industrial State*, New York: Houghton Mifflin.(=1980, 都留重人監訳『ガルブレイス著作集3 新しい産業国家』TBS プリタニカ.)
- Gane, M., 2000, *Jean Baudrillard: In Radical Uncertainty*, London: Pluto Press.
- \_\_\_\_\_, 1991a, *Baudrillard: Critical and Fatal Theory*, London: Routledge.
- \_\_\_\_\_, 1991b, *Baudrillard's Bestiary: Baudrillard and Culture*, London: Routledge.
- Genosko, G., 1994, *Baudrillard and Signs: Signification and Ablaze*. London: Routledge.
- Godelier, M., 1971, "L'anthropologie économique," Copans, J., Tornay, S., Godelier M. et Backes-Clement, C., *L'anthropologie: science des sociétés primitives?*, Paris: E.P., 225-37.
- Jameson, F., 1991, *Postmodernism or, The Cultural Logic of Late Capitalism*, Durham, NC: Duke University Press.
- Kellner, D. ed., 1994, *Baudrillard: A Critical Reader*, Cambridge, Mass: Blackwell.
- Kellner, D., 1989, *Jean Baudrillard: From Marxism to Postmodernism and beyond*, Stanford: Stanford University Press.
- Kroker, A. and Levin, C., 1993, *Jean Baudrillard: From Symbolic Exchange to Virtual Reality*, London: Harvester Wheatsheaf.
- Kroker, A. and Kroker, M. eds., 1988, *Body Invaders: Panic Sex in America*, Montréal: The New World Perspectives.
- Kroker, A. and Cook, D., 1986, *Postmodern Scene*, New York: St. Martin's. (=1993, 大熊昭信訳『ポストモダン・シーン その権力と美学』法政大学出版局.)
- Kroker, A., [1985] 1986, "Baudrillard's Marx," Kroker, A. and Cook, D., *Postmodern Scene*, New York: St. Martin's, 170-80. (=1993, 大熊昭信訳『ボードリヤールのマルクス』同訳『ポストモダン・シーン その権力と美学』法政大学出版局, 263-88.)
- \_\_\_\_\_, and Levin, C., 1984, "Baudrillard's Challenge," *Canadian Journal of Political and Social Theory*, 8(1-2) 5-16.
- Levin, C., 1996, *Jean Baudrillard: A Study in Cultural Metaphysics*, London: Prentice Hall.
- MacLellan, D., 1970, "Marx and the Missing Link: On the Importance of the Grundrisse," *Encounter*, November: 35-45.(=1975, 杉原薫訳『マルクスとその見失われていた環』『経済学批判要綱』の重要性について』『現代思想』3(13) 190-210.)
- Marx, K., [1894] 1964, *Das Kapital*, Bd. 3, Marx-Engels Werke, Bd. 25, Berlin: Dietz. (=1969a, 向坂逸郎訳『資本論(六)』岩波書店, 1969b, 『資本論(七)』, 1969c, 『資本論(八)』, 1970, 『資本論(九)』.)
- \_\_\_\_\_, [1885] 1963, *Das Kapital*, Bd. 2, Marx-Engels Werke, Bd. 24, Berlin: Dietz. (=1969a, 向坂逸郎訳『資本論(四)』岩波書店, 1969b, 『資本論(五)』.)
- \_\_\_\_\_, [1867] 1962, *Das Kapital*, Bd. 1, Marx-Engels Werke, Bd. 23, Berlin: Dietz. (=1969a, 向坂逸郎訳『資本論(一)』岩波書店, 1969b, 『資本論(二)』, 1969c, 『資本論(三)』.)
- \_\_\_\_\_, [1858-1859] 1953, *Grundrisse Der Kritik Der Politischen Okonomie*( Rohentwurf ), Berlin: Dietz.(=1959a, 高木幸二郎監訳『経済学批判要綱 第1分冊』大月書店, 1959b, 『経済学批判要綱 第2分冊』, 1961. 『経済学批判要綱 第3分冊』, 1962, 『経済学批判要綱 第4分冊』, 1965, 『経済学批判要綱 第5分冊』, 1973,

- trans. Nicolas, M., *Grundrisse: Foundations of the Critique of Political Economy ( Rough Draft )*, London: Penguin books. )
- Marx, K. and Engels, F., [1845-6] 1958, *Die Deutsche Ideologie, Marx=Engels Werke*, Bd. 3, Berlin: Diertz. (=2002, 廣松渉編訳『新編輯版 ドイツ・イデオロギー』岩波書店.)
- Marx, K., 1847, *Misère de la philosophie: réponse à la philosophie de la misère de M. Proudhon*, Paris: A. Frank (東北大学附属図書館 貴重書電子展示室 デジタル・マルクス/エンゲルス, [http://www2.library.tohoku.ac.jp/marx/Marx/02\\_Misele\\_de\\_la\\_Philosophie/misere-FS.pdf](http://www2.library.tohoku.ac.jp/marx/Marx/02_Misele_de_la_Philosophie/misere-FS.pdf), 2003. 11. 20), 1968, *Misère de la philosophie: réponse à la philosophie de la misère de M. Proudhon*, Paris: Editions Sociales. (=1950, 山村喬訳『哲学の貧困』岩波書店, 1954, 高木佑一郎訳『哲学の貧困』大月書店.)
- , [1844] 1990, *Okonomisch-philosophische Manuskripte, Marx=Engels Werke*, Bd.40, Berlin: Diertz.(=1964, 城塚登・田中吉六訳『経済学・哲学草稿』岩波書店.)
- 間々田孝夫, 2000, 『消費社会論』有斐閣.
- 松原隆一郎, 2000, 『消費資本主義のゆくえ コンピニから見た日本経済』筑摩書房.
- McCracken, G., 1988, *Culture and Consumption: New Approaches to the Symbolic Character of Consumer Goods and Activities*, Bloomington: Indiana University Press. (=1989, 小池和子訳『文化と消費とシンボルと』勁草書房.)
- 見田宗介, 1996, 『現代社会の理論』岩波書店.
- 水原俊博, 2003, 「ボードリヤールによる古典的マルクス主義の理論的補完 記号論的消費社会論を中心に」『経済社会学会年報』(25) 160-72.
- , 2002, 「初期ボードリヤールの消費社会論の理論的再構成」『経済社会学会年報』(24) 171-82.
- , 2001, 「記号論的消費社会論再考」『経
- 済社会学会年報』(23) 98-110.
- Mumford, L., 1934, *Technics and Civilization*, New York: Harcourt, Brace. (=1953-4, 生田勉訳『技術と文明』鎌倉書房.)
- Packard, V., 1960, *The Waste Makers*, New York: David McKay. (=1961, 南博・石川弘洋訳『パッカード著作集 3 浪費をつくり出す人々』ダイヤモンド社.)
- , 1957, *The Hidden Persuaders*, New York: RandoSm House. (=1958, 林周二訳『パッカード著作集 1 隠れた説得者』ダイヤモンド社.)
- Poster, M., 1990, *Mode of Information: Poststructuralism and Social Context*, Cambridge, Eng.: Polity Press. (= [1991] 2001, 室井尚・吉岡洋訳『情報様式論』岩波書店.)
- Riesman, D. with Glazer, N., and Denney, R., [1950] 1961, *The Lonely Crowd: A Study of the Changing American Character*, abridged ed., New Heaven: Yale University Press. (=1964, 加藤秀俊訳『孤独な群衆』みすず書房.)
- Rojek, C. and Turner, B. S. eds., 1993, *Forget Baudrilard?*, London: Routledge.
- 佐伯啓思, 1998, 『シミュレーション社会の神話』日本経済新聞社.
- Sahlins, M., [1968] 1972 "The Original Affluent Society," *Stone Age Economics*, New York: Aldine, 1-39(=1984, 山内昶訳「始源のあふれる社会」『石器時代の経済学』法政大学出版局, 8-55.)
- \* 初出: 1968, "La première société d'abondance," *Les temps modernes*, (268) 641-80.
- Styron, W., [1960] 1993, *Set This House on Fire*, New York: Vintage Books.
- 内田隆三, 1987, 『消費社会と権力』岩波書店.
- Vernant, Jean-Pierre, 1965, *Mythe et pensée chez les Grecs*, Paris: Maspero.
- Weiss, P., 1964, *Die Verfolgung und Ermordung Jean Paul Marats dargestellt durch die Schauspielgruppe des Hospizes zu Charenton unter Anleitung des Herrn de Sade*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.(=1965,

trad. Baudrillard, J., *La Persécution et l'assassinat de Jean-Paul Marat: représentés par le groupe théâtral de L'hospice de Charenton sous la direction de Monsieur de Sade: drame en deux actes*, Paris: Seuil, 1967, 内垣啓一・岩淵達治訳『マラーの迫害と暗殺』白水社.)